

せ と る
C E T L

くおーたりー

Quarterly

教育・学習活動支援センター広報 No.38

発行日 16. February. 2010

巻頭言 キャリアアップを支える大学教育の本質

キャリアセンター長 山中 馨

日本の企業は人事採用の際に学生のどこを見ているのか。多くの企業では、大学での専門知識や成績はあまり考慮しない、問題はその学生の持っている実行力、主体性、創造力などであるとしている。確かに、OJTなど新入社員の研修を完備する日本企業にあっては、大学の成績は採用条件としては軽いものであるかもしれない。ある企業の社長さんは、「ウチの有能な社員をみていると大学の成績は全く関係がない、そのようなものは無視している」と言い切った。しかし、最近この通念に反する調査結果が複数発表されている。多方面からの主張であり、大学人として注目に値する。

一つは電通育英会と京都大学が共同で実施した調査である。第一志望の本命の企業から内定を取れた学生の特徴として、「対人志向」「勉学志向」共に高いことが示された。例えば携帯電話の登録人数が多く、頻繁にメールをする。親しい異性の友人のいる割合も高い。また大学の勉学にもかなり熱心であるなど。一方、内定が取れない学生や途中で就活放棄をした学生は、「対人志向」「勉学志向」共に低い。交友関係が狭く、広げることに興味がない。ゲームに費やす時間が長く勉学の時間が短い。この調査で

は、キャリア教育全般で「勉学志向」を従来以上に重視するべきであると主張している。

もう一つは総務省が行った非正規雇用から正社員への移行の実態調査である。正社員への移行率の高い要因の一つに個人の側面があるとしている。非正規雇用の期間で「自己啓発」を行った実施率をみると、高卒が低く、大卒、大学院卒になるにしたがって高くなり、その差が大きい。「自己啓発」する者の方が正社員への移行の可能性が高いことを示して、自らの意思で学ぶ重要性を指摘している。

昭和女子大学の矢野真和教授による大学卒業生の追跡調査も興味深い。その結果では「学んでいるサラリーマンが所得が高い」。すなわち「勉強しているサラリーマンがいい仕事をしている」と結論している。矢野教授は、「現在勉強しているサラリーマン、現在読書しているサラリーマンは、大学時代に学んでいるし、読書している」と指摘し、結局は「学生時代に学ぶという習慣を身につけることが、その後の生涯における学びを支える」としている。つまり大学教育の本質は、「学びの習慣」を身につけさせることであると主張している。

これらの調査の中には、「大学で勉強すること

は1人でできる。勉強に打ち込み、友達を作ること以上に簡単なことはないだろう」と勉学への決心を促しているものもある。しかし、大学教員としては、学生個人の努力に期すだけではなく、学びへのモチベーション喚起を行うことがその役回りではなかろうか。学びには外的動機でなく内的動機づけが必要である。生涯をかけるような己のやりたいことが見つからず悶々としている学生は多い。就職活動の早期化が更に学生にストレスをかけている。これでは、学

びの動機は出てこない。しかし、ここは、むしろ無理やり早くから生涯の仕事を決める必要はないと捉えて、それよりも大学時代に、多様な学びの経験をし、学びの習慣を身につけることにしたら良い。就職してから学びの意欲がわく場合もある。その時に、大学時代の学びの習慣が活かされるような基盤を作っておくことである。こう考えてくると大学での基礎教育であれ、専門教育であれ、全てが生涯のキャリアアップを支えるキャリア教育である。

第7回 FD フォーラム開催

12月12日、13日の2日間にわたり、大教室棟S201教室において、学内外合わせて延べ280名を超える大学教育関係者が集い、2009年度創価大学FDフォーラムが行われた。今回はCETL開設10周年を記念したパネルトークやパネル展示なども含めたFDフォーラムを12日に、そして本学が関わる3つのGP事業についての合同フォーラムを13日にと、2日間の開催となった。

12日FDフォーラム (13:00~16:45)

10年前、CETLが初めて開いたFD講演会の最初の講師でもあった、立教学院本部調査役の寺崎昌男氏による「学士課程教育の新段階と私大教員の使命」と題する記念講演が行われた。この中で寺崎氏は中教審答申や中長期的な大学教育の在り方、FDの定義について解説した上で、すでに行っているFDの「発見」に多くの可能性

つづくパネルトークでは「創価大学の組織的FD活動10年のあゆみ」をテーマとして、名城大学副学長池田輝政氏をコメンテーターに迎え、馬場副学長、坂本教育学部長、関田教育・学習活動支援センター長が、教員の意識変革や授業方法の改善等の活動について活発な議論を展開した。



寺崎昌男氏

がある事を指摘。さらに、SD (Staff Development) の本格展開に向けた「自校教育」の必要性を訴えた。



パネルトークの様子

13日GP合同フォーラム (9:50~11:15 / 13:00~16:30)

第一部

第一部では、東京工業高等専門学校の水谷惟恭校長より「未来学の取り組みより」をテーマ



水谷惟恭校長

に八王子の大学間連携について八王子未来学の概要説明があった。

八王子未来学は、東京高専を代表校にして、八王子にキャンパスを持つ16の高等教育機関が連携し、大学・市民・行政の協働を進めることで、地域の活性と密接に連動した文化・教育振興を図るGP採択事業である。特に大学連携の方向として、FD・SD活動の共有が目指され、水谷校長自らが、自校の取り組みを「八王子未来学とKOSEN FD」として紹介された。

次に、第一部の基調講演として、文部科学省高等教育局大学改革推進室長の今泉柔剛氏が、「大学間連携を進める共同FD活動について」をテーマに、FD活動の現状、FDに関する制度改正と現状の課題、大学に期待される取組、国からのFD支援、大学間連携を通じた質の保証、大学教育充実のための戦略的大学連携支援プロ



今泉柔剛氏

ラム等、学士力確保と教育力向上プログラムの必要性について語った。

第二部

今年度が最終年度となる現代GPからは、勅使河原可海工学部教授が「学生が協調的に作問

又部科学省 戦略的大学連携支援事業



勅使河原可海教授

可能なWBTシステム～ICTを活用した自律的学習の推進～」の概要を説明。

つづいて、高木正則工学部助教が「Collab Testの活用と今後の展開」と題して実績報告を



高木正則助教

兼ねてCollab Test今後の展開・課題について報告を行った。



大盛況のフォーラム

参加者内訳：

[12日FDフォーラム]

学内関係者：140名 学外者：25名

[13日GP合同フォーラム]

学内関係者：72名 学外者：48名

第二部の基調講演では、「持続可能なe-learning活用の組織的知識マネジメントとFD」をテーマに、教育システム情報学会会長の岡本敏雄氏が講演。創価大学の「ICTを活用した教授・学習」について、着実な教育実践と組織的運営、きめ細かなコンテンツの開発、そして長期的視野に立った取り組みの更なる進展を期待。また、e-learningとLD（Learning Design）の統合、教育活動に含まれる学習活動や支援活動の構造を



岡本敏雄氏

第二部のパネルトークでは、「ICTを活用した教育の展望」をテーマに、パネラーとして千歳科学技術大学の小松川浩教授、帝塚山大学の中嶋航一教授、九州工業大学の大西淑雅講師、佐賀大学の穂屋下茂教授、そして創価大学からは情報システム部の石橋博道課長が参加。



パネルトークの様子

望月雅光経営学部准教授をコーディネーターに、情報通信技術を活用した教育の展望について活発な議論がなされた。また、会場の参加者

からも活発な質問が飛び交い、教育・研究改善に向けた情報の共有化が図られた。

参加者の声

[12日FDフォーラム]

- ・寺崎先生の話がよかった。パネルトークでの学生の発言が驚きであり、すばらしい教育が行われている成果ではないかと思った。
- ・CETLの特色が伝わりました。本学でも参考にしたい。
- ・創価大学のFDが学生迎合型でないこと、大学生のあるべき姿を明確にして、そこに向けて教育しようとしていること、FDはそこを支援していることが分かった。
- ・SDの活動について、大きな視野に立った貴重なお話を伺い、自校改革の決意を一段と深くさせていただいた。

[13日GP合同フォーラム]

- ・八王子未来学の試み、大変興味深く拝聴しました。
- ・CollabTestのアイデアル運用、結果は素晴らしく、大変感心する内容でした。
- ・組織的に実施されていてよく機能していると感じました。
- ・パネルディスカッションについて、もう少し時間がとれて、質疑応答ができるとよかった。

本年度第6回FDセミナーを開催

本年度最後となる第6回CETL・FDセミナー「より良いシラバスの書き方」は、1月22日（金）16時40分～18時20分に文系A棟A424教室で開催され、教職員26名が参加しました。

最初に、コーディネーターを務めるCETLの西浦昭雄副センター長の挨拶のあと、本学教務部教務第1課の澤登秀雄課長より「シラバスに関する高等教育界の動向と創価大学のシラバス」と題し、シラバスをめぐる日本国内外の動向や求められている内容、本学の取り組みについて紹介がありました。その後、シラバスのあり方

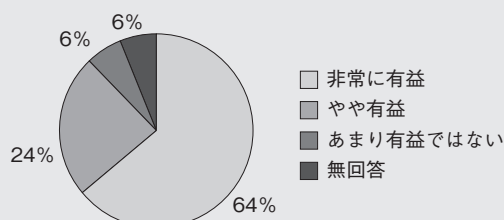


吉川成司先生

について活発な質疑応答や意見交換がありました。

つづいて、本学教育学部教授の吉川成司先生より、シラバスのもつ意義や目的、評価方法についてご自身の経験や豊富な事例を交えながら解説がなされました。吉川先生の「そもそもシラバスとは、コースの始めに教員が学生に示す詳細な授業計画のことであり、一種の契約書として、教員と学生双方が授業に責任を持つことを促す意味を持つ」という趣旨の指摘は印象的でした。

研修会の内容はどの程度有益でしたか？



会場の様子

参加者の声

- ・ 具体的な実践例及び取り組みの紹介があり、イメージができた
- ・ 他学部、他大学の先生方の所見を聞くことは、大変参考になった
- ・ コースの計画を考える上で、非常に有益だった
- ・ シラバスの意義について、根本的な議論が必要であると感じた
- ・ シラバスに関する基本的な考え方が、明確になり、自分のシラバスを見直すよい契機となった
- ・ シラバスについて、学生の学びの過程を教員がデザインするという発想で捉え直したいと感じた
- ・ 二人の講師の話から、本学の学生の力量を高めるための授業構想がいかに大切であるかを実感した

教育サロン「第2回 女性教員の情報交流会」を開催

1月21日(木)、本年度3度目の教育サロンが文系A棟7階の会議室で開催されました。昨年1月22日に行った女性教員限定のサロンが大変好評だったことを受け、「第2回 女性教員の情報交流会」を企画しましたが、24名の先生方にご参加いただくことができました。

今回は、サロンの目的を「女性研究者のおかれている現状(国内外)を把握すると共に、個人および創価大学における状況について振り返る」こととし、伊藤佑子教授(工学部)の「国の女性研究者支援策の動向」に関するご報告と、坂本辰朗教育学部長の「日米比較からみた女性

大学教員」というテーマでのお話の後、オープン・ディスカッションとして参加者全員で意見交換をしました。

社会的に「男女共同参画」の重要性が叫ばれている今、本学においてもそうした気運を高めゆくことの大切さを参加者全員で確認し合うと共に、女性教員限定のサロンに対する要望があることも確認されました。



会場の様子

マスマス・キャンペーン2009(マスキヤリ)が終了

12月16日(金)17時から17時30分まで、学生ホール内の多目的ホールにて、山本学長の臨席のもと、マスマス・キャンペーン後期の修了式兼表彰式が行われた。

キャリア・デザイン基礎を受講する学生を主な対象とする今回の取り組みには、177名(48グループ)が応募。その内、途中の数学力診断テスト、進捗度テストと着実に取り組み、最終テストまで残った116名の中から、84名(25グループ)が「敢闘賞」に選ばれた。



学長と参加者たち

編集後記

CETL10周年の節目を二日間のフォーラムという、大きなイベントで飾ることができました。本学教職員の教育改善に対する真剣さに、改めて感動しました(S)。

CETL Quarterly No. 38

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町1-236

Tel: 042 (691) 9782 内線 2146

E-mail: cetl@soka.ac.jp

http://cetl.soka.ac.jp